る可らず。

〔六三〕 鬱督軍山、烏德犍山、又周書突厥傳に「可汗恒處於都斤山」と記せる都斤山等が同一山の名なるは疑無く、而して此の山が突厥碑文に見ゆる Ütükän 山にして Orkhon 河の西方の山、元代の史に和林山といふものに相當するものなるべきことも既に一般に認めらるゝ所なり、Hirth, Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk, S. 33-34.

Chavannes, Les Tou-kiue occidentaux, p. 14. note.

白鳥博士東胡民族考（史學雜誌第九十三號一二二頁）等參看。

但し Hirth 氏が突厥牙帳の所在地を於都斤山と讀み、以て Ütükän の音を寫したるものと見たるは固とより誤なり。

〔六四〕 白鳥博士は之に就きて「白霫は元と同羅・僕骨等の諸族と共に、この山谷の間に放牧せしなり」と曰ひ（史學雜誌第二十三篇一二五頁）、只だ一山の名として狹義に解かれたれど、如何あらん、突厥碑文に ütügän-jysch 或は ütügän jir 卽ち ütügän の森、ütügän の地といふものが、單に Orkhon の西の山脈のみならず、廣き範圍に及べる山地を指せるものにして、少くとも Tola 河域を含める Orkhon 河の全流域を包めるものならざる可らざることは、既に Radloff 氏の說ける所なり（Hirth, Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk, S. 34）に載せたる Radloff 氏の書翰）。

〔六五〕 那珂博士成吉思汗實錄六〇六—六二〇頁參觀。

〔六六〕 漢字にて記せる徽號は Kara B. の回鶻碑文に見ゆるものにして、羅馬字のものは Šine-usu の磨延啜の碑文北面第一行に突厥字にて記せるものなり、兩者全く符切を合するが如きを見るべし。

〔六七〕 唐書回鶻傳に「磨延啜立、號葛勒可汗」と見ゆれど、Kara Balgassun の回鶻可汗紀功碑にも Šine-usu 碑文にも此の號を認めず。

〔六八〕 册府元龜繼襲篇が大概の場合に於て舊唐書と一致し、行文も略ぼ同一なるに係はらず、此の場合に於ては之と異り會要に一致するは注意すべきことにして、此の篇が全く舊唐書の轉載に非るを知るべし。

〔六九〕 Šine-usu 碑文に年の名の見ゆるは、鷄の年卽ち至德二年丁酉（七五七年）に當るものを以て終とし、以下の記事に